

新除草・調節剤

トクノール乳剤

NTN5006除草剤

(取扱メーカー) 日本特殊農薬製造株式会社

対象作物: 芝(コウライシバ・ヒメコウライシバ・
ノシバ)

性状・作用特性: 本剤の有効成分は、O-エチルO-(2-ニトロ4-メチルフェニル)N-イソプロピルホスホロアミドチオエートで、50%を含有する乳剤である。

本剤の芝地での試験は、昭和44年以来、東京都農試、栃木県農試、植調研究所並びに関東各地のゴルフ場において、除草効果および芝への薬害試験をくりかえし行ってきた。

除草効果試験の結果では、雑草発芽前処理で、芝地内に発生するイネ科1年生雑草並びに広葉雑草に対して、アール当たり60~80cc処理区で高い効果が得られ、雑草発生抑制期間も、特にイネ科雑草に対しては、90日~120日におよぶ場合があった。たゞ、キク科雑草が優占種である芝地においては、本剤の効果が劣るので使用はさけられるべきである。

現在まで供試された芝の種類としては、コウライシバ、ヒメコウライシバ、ノシバ、ベントロス・ベントグラス、などがあるが、アール当たり60~80ccの薬量では、コウライシバ、ヒメコウライシバ、ノシバに全く薬害の恐れはない。しかし、ベントについては、試験例数が少ないので、継続して試験を行なうことになっている。アール当たり100cc処理しても問題のない場合、100cc以下の薬量でもすぐ回復するが若干葉先の枯れる場合(芝の植付年次が

関係するのではないかとの意見もある)もあるので、薬害を絶対回避しなければならないベントグリーンでの使用については、今後とも実用試験を重ねる予定である。

毒性: 急性経口毒性は720mg/Kg(ラット)、680mg/Kg(マウス)、急性経皮毒性は4000mg/Kg、魚毒性はB類である。なお、植物体中の分解が容易かつ速やかであるので、残留性は問題にならない。

使用方法: イネ科1年生雑草および広葉雑草(キク科雑草を除く)を対象とし、1アール当たり60~80ccを30ℓの水で稀釈し、雑草発芽前に土壌処理する。

ニップ水和剤

NIP除草剤

(取扱メーカー) 三洋貿易株式会社

対象作物: 芝(コウライシバ・ヒメコウライシバ)

性状・作用特性: 本剤の有効成分は、2,4-ジクロルフェニル-4-ニトロフェニルエーテル(NIP)50%の水和剤である。

NIPは現在、水田、園芸畑作物、山林苗畑で使用されている非ホルモン接触型の除草剤で、接触害作用は選択的である。

本剤の芝に対する安全性は、コウライシバ、ヒメコウライシバに対しては特に安全性がある。除草効果は、メヒシバ、スズメノテッポウ等のイネ科雑草には特効的に効き、その他1年生の雑草にも高い効果がある。土壌水分、降雨条件、温度条件によるフレも少なく、また永年使用による土壌への蓄積害のおそれも少ない。特に根からの吸収害がないので、造成中やスリ切れた

新除草・調節剤

芝に最適である。

毒性：人畜に対する急性経口毒性は $LD_{50} = 3580 \text{ mg/Kg}$ (ラッテ) で極めて低毒性で、魚毒性も $TLM(48 \text{ 時間}) = 34 \text{ ppm}$ で魚貝類に対する毒性は極めて少ない。

使用方法：造成中または造成された芝のコウライシバ、ヒメコウライシバを対象として、雑草の発生前から遅くとも1～2葉期までに 1 m^2 当たり $0.7 \sim 1 \text{ g}$ を $200 \sim 400 \text{ cc}$ の水で希釈して全面に土壤処理する。

使用上の注意：本剤はキク科、ナデシコ科の雑草には充分の効果を発揮しないので、これらに優占する芝ではCTA剤と混用するとよい。コウライシバ、ヒメコウライシバ以外については、現在検討中であるので使用をさけること。

クロロ-I P C 乳剤 I P C 除草剤

(取扱メーカー) 日産化学工業株式会社

石原産業株式会社

対象作物：芝(コウライシバ)

性状・作用特性：本剤は、イソプロピル-N

-(3-クロロフェニル)カーバメートを45.8%含有する淡褐色の乳剤である。非ホルモン型の除草剤で、イネ科雑草、タデ類、ハコベ等に卓効を示す。本剤は根から吸収されて細胞分裂や呼吸を阻害するので、雑草の発芽前や、発芽直後に土壤処理する。除草活性と残効期間は、低温条件ですぐれる。

毒性：急性経口毒性は LD_{50} ラッテ、ウサギとも、約 5000 mg/Kg 、腹腔内注射の場合、ラッテで $LD_{50} = 700 \text{ mg/Kg}$ と低く普通物である。魚毒性もまた低く、A級にランクされる。

使用方法：1アール当たり $40 \sim 60 \text{ cc}$ を、 $20 \sim 30 \text{ l}$ の水に希釈し、対象の芝全面に散布する。処理時期は、10月～3月までの冬期～早春処理で、雑草の発芽前から発芽直後(発芽後2～3葉期まで)まで。イネ科雑草の優占地帯に使用する。

使用上の注意：①雑草が生育して5～6葉期以上になると効果が劣るので、処理時期に注意する。
②気温 20°C 以下の低温条件下で使用する。
③広葉雑草には効果が低いので、この優占地帯での使用はさける

編集後記

霜月、各地で雪のたよりが聞かれる頃ともなると、農作業も一段落し、越冬の準備にとりかかる。狭小の土地で農業生産をしなければならぬ農家にとっては、食うのがやっとな。否、出稼ぎによって糧を求めなければならない。このような兼業農家にとっては、農作業の省力化方法として、除草剤が重要な役割をはたしている。これらの農家の期待に応えるために農協の技術者が音頭をとり除草剤散布機による効率的な散布を考える必要があるのではないだろうか。

財団法人 日本植物調節剤研究協会
東京都港区芝西久保桜川町26番地
東話 東京(03)502-4188(代)

昭和46年11月発行

第5巻第8号

¥70(送料35)

編集人 日本植物調節剤研究協会常務理事 吉沢長人
発行人 植調編集印刷事務所 広田伸七

東京都港区芝愛宕町1-3 全国農村教育協会内
発行所 植調編集印刷事務所

電話 東京(03)436-3388番